【消費者フォーラム in HIROSAKI】

学校でも SDGs
～じつはこんなにやっている～

大賀重樹

１．はじめに

SDGs の主人公は誰かというと、紛れもなく、2030 年に社会の中心となる、現在、中学生、高校生、大学生のみなさんです。今日は、その主人公のみなさんにお話ができること、そして、実践発表を聞く機会を戴いたことに深く感謝しています。今回、私は学校での SDGs についてお話ししますが、学校ですでに数多くの SDGs にかかわる実践が行われていることが伝われば幸いです。

２．JICA 青年海外協力隊と SDGs

私のこれまでの経歴を少し紹介させていただきます。小学校現場を５年経験した後に JICA 青年海外協力隊に参加しました。JICA 青年海外協力隊をご存じない方も多いかもしれませんが、弘前大学教育学部の富田晃先生はホンジュラスの先輩 OV であり、農学生命科学部の佐藤孝宏先生もシリアの隊員 OV です。他にも弘前大学関係の隊員 OV が 10 人くらいおられますから、弘前大学とも深いつながりがあります。

さて、私が派遣された国は、中米ホンジュラス共和国。とても貧しい国で小学校に入学しても、簡単な読み書きができるようになると、畑を耕したり、家の仕事を手伝わせたりするため、学校に来なくなります。私が関わったある小学校では、約 80 人の子どもが入学しても、６年後卒業するのは８人くらいで、子どもは家族の労働力で、教育は二の次となっているのが現状でした。

この国の私の業務は、小学校の先生に算数の指導法を教える仕事でした。数量関係や分数などテーマごとに約 30 時間の講習会を開き、基礎知識や指導法を教えたり、実際の授業観察をして指導法をレクチャーしたり、授業で使う教材をつくる勉強会などをしたりしました。数学は、記号や数字が共通な部分が多く、拙いスペイン語でも教具を使いながら何とか業務をこなすことができました。一緒に仕事をした先生方は学習意欲が高く、未来の国を創る人財を育てるため、ホンジュラスの教育水準を上げようと必死でしたし、給料が８ヶ月遅配となっていても授業をやり続ける姿に感動しました。だからこそ、我々 JICA 海外協力隊のメンバーも真剣に活動しました。

また、卒業式は、夜、仕事が終わった家族が参加できるようにしています。一人ずつステージに呼ばれ、卒業証書を受け取り、家族と担任、校長先生が写真を撮ります。家族にとって、子どもの卒業は一大イベントなのです。誰のための教育か考えさせられます。日本の学校教育にはない観点で、持続可能な学校の取り組みだと感じました。

JICA 海外協力隊は、派遣された国で「国づくり人づくり」の支援を行います。それぞれの国が持続可能な社会を創ることができるように支援していくのです。この 2 年間の経験こそ、私自身、学校現場で SDGs を実践するエネルギーの源となったことは言うまでもありません。

３．SDGs ってなに

ご存じのように SDGs は、2015 年 9 月に国連に加盟する全ての国が採択した国際的な目標です。サスティナブル（持続可能な）、ディベロップメント（開発）のゴール（目標）です。

2030 年の世界をより良いものにすることを目的に生まれたプロジェクトです。地球上にある豊かな自然や資源を未来に残し、誰ひとり取り残すことなく、幸せに暮らせる世界をつくるために，世界各国の人たちが取り組んでいます。

2018 年 2 月には、14.9%だった SDGs の認知率《電通調べ》も 2022 年 1 月には 86%に上がり、世の中で当たり前に話題となるようになりました。

次に SDGs の達成状況を見てみます。2022 年の日本は、諸外国の中で順位が 19 位となっています。2018 年の 18 位から下がっているのが現状です《Sustainable Development Report 2022》。

目標を達成しているのは、ゴール④「質の高い教育をみんなに」、ゴール⑨「産業を技術革新の基盤をつくろう」、ゴール⑯「平和と公正をすべての人に」の３つです。

反対に主要な課題が残っているとされているのは、ゴール⑤「ジェンダー平等を実現しよう」、ゴール⑫「つくる責任つかう責任」、ゴール⑬「気候変動対策に具体的な対策を」、ゴール⑭「海の豊かさを守ろう」、ゴール⑮「陸の豊かさを守ろう」、ゴール⑰「パートナーシップで目標を達成しよう」となっています。とくにゴール⑭の「海の豊かさを守ろう」、やゴール⑮「陸の豊かさを守ろう」は、近年数値が改善されておらず、達成が難しいと言われています。

このように 17 のゴールの中でも、達成状況が大きく異なります。この事実をもとに「どうしてなのかな？」、「どうすれば、改善するのだろう？」など、子どもたちと一緒に考えながら、授業を組み立てていくのも興味深いと思います。

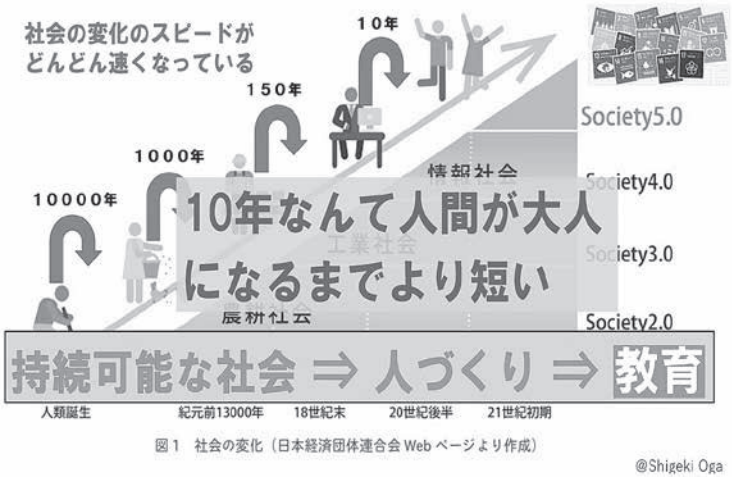


図1　社会の変化（日本経済団体連合会 Web ページより作成）

４．学校と SDGs

上の図のように、政府は現代までの人類史を５段階に分類することで、未来社会を Society5.0 と表現しています。これまでの変遷を振り返ってみると、1.0 から 2.0 までは、約 10000 年かかり、2.0 から 3.0 までは、1000 年、3.0 から 4.0 までは、150 年、4.0 から 5.0 までは、10 年とかかったと言われています。

私は昭和生まれで、昭和の終わりにはすでに教師になっていました。情報社会の前の時代です。正直、こんなに目まぐるしく変わるとは思ってもみませんでした。ところが、現実の社会の変化のスピードは、加速度的に速まっています。10 年といえば、人間が大人になるまでより断然短いのです。これから、10 年後はどうなっていくのでしょう。想像がつかないというのが正直なところです。持続可能な社会を創るためには、人づくりですから、教育、それも９年間の義務教育の重要性は、さらに大きくなってきています。

さて、学校現場では、「学習指導要領」というものが存在します。これを元に教科書が作成され、各学校での授業が組み立てられます。ですから、ここに明記されると、必ず学校現場で実施しなければならないということで、非常に重要なものです。

平成 29 年、この学習指導要領の前文、つまり全体について紹介する部分に以下のよう記載されました。

「これからの学校には、一人一人の児童（生徒）が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在 として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、『持続可能な社会』の創り手となること ができるようにすることが求められる。」

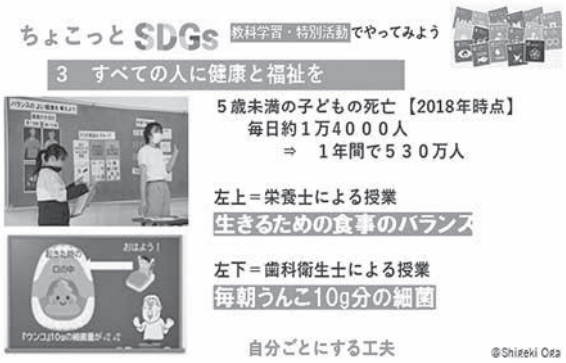
この文言から､教科書も､学校現場も変わっていきました。「学校教育全体並びに各教科」の部分では「教育活動の充実を図る」とも明記されました。小学校でも中学校でも教育活動の様々な場面で、SDGs の概念を具現化する学習活動が一気に増えてきました。

そして、今後は、目まぐるしい社会の変化に対応するため、短い間隔でこの学習指導要領が改訂されると考えられています。

５．SDGs の実践

実際に学校での SDGs 実践について紹介していきます。「ちょこっと SDGs」、「がっつり SDGs」、「まるごと SDGs」に分けて見ていきます。

（1）ちょこっと SDGs



子どもたちは絵本が大好きなので、朝読書やちょっとした空き時間に、読み聞かせをします。絵本「もったいないあばあさん」は、水が出しっぱなしだったり、電気がつけっぱなしだったり、食べ物を無駄にしたりする子を見つけると、怒ります。当たり前のことですが、大切です。この読み聞かせをきっかけに　世界のさまざまな問題を考えるきっかけができます。どこの学校にも絵本はありますし、図書担当の先生に聞けば、色々紹介してくれるはずです。何冊か教室においておくと、ちょこっとの時間に活用できます。ただの読み聞かせで終わるのでなく、一歩、切り込む工夫があると良いです。これは、ゴール⑥「すべての人に水と栄養のアクセスを」に関わる実践となります。

また、１コマの授業に栄養士の出前授業を活用する実践もおすすめです。子どもたちに何のために食事が必要なのかを考えさせるきっかけになります。３つの食品グループの違いや働き、適切な食事の方法を専門家から聞くことで自分事になります。ここでも５歳未満の子どもも死亡数（2018 年１年間で 530 万人）について触れることで、さらに深い理解となるはずです。

他にも、歯科衛生士の方に来ていただき、「毎朝起きたとき、口の中にはうんこ 10 ｇ分の細菌が入っている。」と教えてもらったときは、子どもたちも驚いていました。子どもたちは、帰宅後から、本気で歯磨きをしていました。一コマの授業をちょこっと入れ込むだけで、子どもたちの意識と行動は変わります。これらは、ゴール③「すべての人に健康と福祉を」に大きく関わる実践です。

さらに、委員会活動でもできます。環境委員会の自体は、どこの学校でもやっていることがほとんどですが、ペットボトル等の回収、牛乳パックリサイクル、３Ｒチャレンジ等に取り組んでいます。子どもたちがSDGsの担い手となっていることを自覚させることで、より活発な活動になります。本校も３Ｒプロジェクトで３年連続の優秀賞を青森県から頂いており、もう当たり前になっている活動です。こうして、これらの活動は、ゴール⑫「つくる責任つかう責任」に関わる実践となります。

（2）がっつり SDGs

続いては、青森市で使われている教科書から、SDGs 関連の単元学習を紹介します。名付けて「がっつり SDGs」です。拾いきれないものも多いくらいですが、SDGs の 17 のゴー

ルと結びつけることで、未来の社会の担い手となる子どもたちへ必要な教育がどのように編成されているのかが分かります。

① 道徳　１年生「はしれさんりくてつどう」では、故郷のために協力することの大切さを学びます。ゴール⑨「くらしを支える土台をつくろう」に繋がります。

② 生活科　２年生「みんなで育てて食べたいな」では、春から秋にかけて畑や鉢で野菜作りを行い、収穫した野菜でパーティーを開きます。ゴール⑫「考えて作り大切に使おう」やゴール⑮「陸の豊かさを守ろう」と深く関わった実践です。

③ 生活科　２年生「はっけん　じぶんのよいところ」では、学級の友だちについて男女の区別なくお互いに理解を深め、みんな違ってみんな良いことに気付き、多様性を認め合い、尊重し合う姿勢を育てます。ゴール⑤「ジェンダー平等を実現しよう」に関わる実践です。

④ 理科　３年生「風のはたらき」「光を調べよう」では、自然エネルギーのしくみや生活との関わりについて学びます。これらは、ゴール⑦「自然の力でつくるクリーンなエネルギーをみんなに」に関わる実践です。

⑤ 社会　４年生「自然災害からくらしを守る」では、自然災害、地域との協働、防災について学びます。これらは、ゴール⑨「くらしを支える土台をつくろう」、ゴール⑪「安全安心なまちづくり」、ゴール⑰「パートナーシップで目標を達成しよう」に関する実践です。

⑥ 家庭科　5・6 年生「こんだてを工夫して」では、栄養バランス、安全な食品、食品ロス等について学び、ゴール②「飢餓をなくすこと」、ゴール③「すべての人に健康と福祉を」、ゴール⑫「つくる責任つかう責任」に関する実践です。

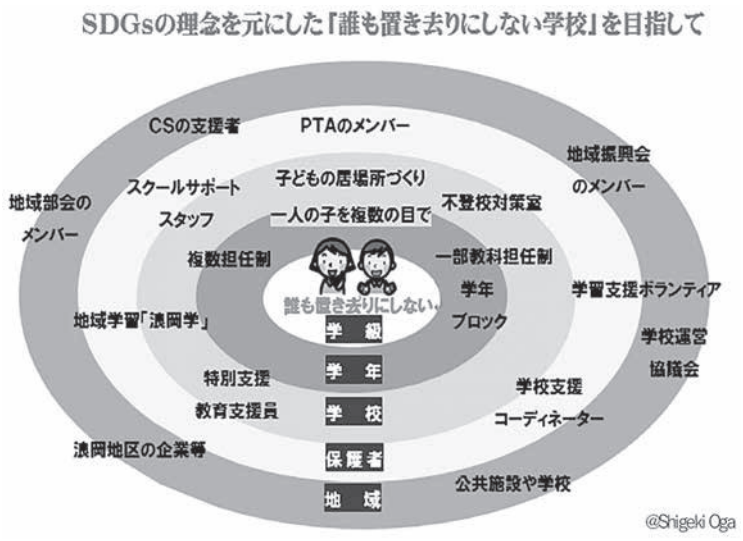
⑦ 国語では、どの学年にも説明文等の教材に SDGs に関わる題材が取り上げられており、読んだり、話し合ったり、自分の意見をまとめたりする中で、SDGs の諸問題を自分事にする学修となっています。

このように、日本の学校教育では、SDGs 関連の教育活動が充実していると言えます。しかし、児童の意識が低かったり、教師自身が SDGs との関連付けができていなかったりすることもあります。そのためにも、教師自身の SDGs に関する学びを深めることが不可欠であると考えます。

（3）まるごと SDGs

ここでは、本校の教育活動全体を、SDGs の観点から見ていきます。教科学習という枠でなく、学校経営方針からの取組紹介となります。

まず、本校は、目指す学校の姿を４つに分けて捉えています。



①「子どもたちが行きたくなる学校」
②「保護者が安心できる学校」
③「地域とともに子どもを育てる学校」
④「教師の働き甲斐のある学校」

これらをもとに「信頼関係でつながり、誰も置き去りにしないみんなが輝く学校の実現」を目指しています。まさに、学校まるごとが SDGs に取り組んでいます。

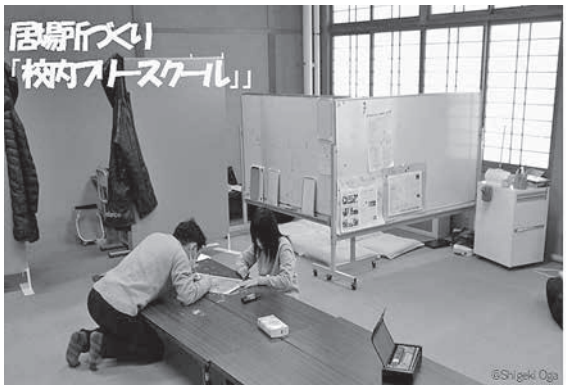
①「子どもたちが行きたくなる学校」

まず何よりも取り残してはいけないのは、「子どもたち」です。不登校、いじめ、学力不振、ここ数年は、コロナ禍での教育活動となり、子どもたちが楽しみしている様々な活動ができなかったり、やり方を制限したりするなど、「学校に行きたい」と感じる場面が減ってきていました。

右の図の取り組みの中でも、居場所づくりの校内フリースクールは、ゼロからのスタートでした。不登校の子どもたちの居場所として、保健室登校、別室登校等はありましたが、新たな選択肢としてつくりました。ここは、「登下校の時刻は自由」、「活動内容は自分で決める」、「オンライン学習や読書、お絵かきも OK」としました。

すると、「こんな場所がほしかった」、「ここなら、学校に来られる」、「給食もここなら食べられる」との声が上がり、何人かが登校できるようになりました。

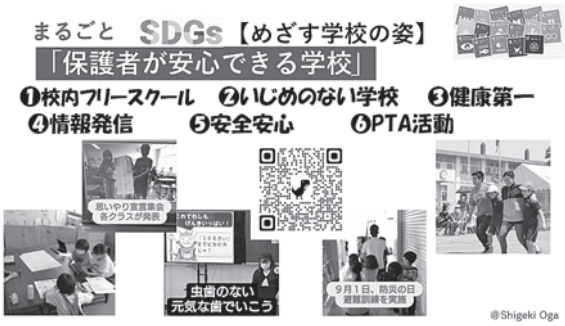
また、５年生の米作りの学習では、今までは全校児童に無料で配っていましたが、今年度は、参観日に保護者に販売しました。今年度、隣の大栄小学校と統合となりその記念植樹の原資を稼ぐためのお米販売だからです。「一袋３合にするか５合にするか」、「値段はいくらがいいのか」、「売り上げ目標を達成のため、どうしたら完売できるか」等々、子ど



もたちは、手を尽くして調べ、販売の準備をし、参観日当日は、見事に完売させました。授業中、廊下を売り歩いたり、売り上げを数えたりする姿は、今までにない光景で主体的で深い学びとなりました。

このように、学校に居場所を作ったり、楽しい活動や行きたくなるような仕掛けをつくったりすることで、子どもたちを誰も置き去りにしない学校、子どもたちが行きたくなる学校を目指しています。

②「保護者が安心できる学校」



誰も取り残さないの２番目は、「保護者」です。学校は、大切なお子さんをお預かりしています。本校では、安心してお子さんを預けることができるように右の図のような取り組みを行っています。

本校でもいじめ案件は、発生しています。昨年度の認知件数は、23 件でしたが、今年度は、12 月末現在で、すでに 60 件となっています。些細なことでも、「いじめ」として認知し、児童に行動を振り返らせ、加害児童、被害児童の両保護者にも知らせています。いじめ発生の３ヶ月間、経過観察し、その後の様子について確認するなど、「いじめはわるいこと、いじめを許さないこと」を繰り返し指導しています。

また、コロナ禍において参観日や学校行事が少なくなり、保護者が子どもたちの学校生活を知る機会が大きく減少しました。学校でのお子さんの様子が心配な保護者も多数おられます。そこで、今まで以上に、学校生活についての情報発信の方法を増やしています。毎月の学校だよりの他、ホームページでの発信、まちこみメールへの文書添付や学校生活の写真配信、Instagram 運用を開始とほぼ毎日の更新などを行っています。個人情報の管理をしながら、取り組んでいます。

このように、保護者が安心して学校にお子さんを預けていただけるような取り組みは、今後もさらに重要となると考えています。

③「地域とともに子どもを育てる学校」

子どもたちが安全に学校に来て過ごすには、地域の方々との協働なくしては考えられません。逆に、地域の方からの協力があればあるだけ、素晴らしい学校、学びの場となります。昨夏の豪雨の際には、本校の体育館も避難所が開設されました。ハード面でもソフト面でも繋がっています。

本校では、右の図のような取り組みを行い、地域を取り残さない、地域に取り残されない学校を目指しています。

本校の教育活動は、地域の方々のサポートなくしては考えられません。低学年の学区探検では、10カ所以上の商店や施設を訪れます。温泉、洋菓子屋さん、花屋さん、保育園、自動車学校、おやきやさん等、地域の方々が子どもたちを温かく迎えてくださり、かけがえのないふるさと学習になっています。また、５年生は、地域の方々が田んぼを提供して下さし、田植えや稲刈りの体験を行い、今年度は、記念植樹にまで学習を広げることができました。

浪岡北小公式 Instagram から

また、学習支援ボランティアには、保護者はもとより、地域の方にも協力していただいています。裁縫学習、調理実習、スキー学習、学区探検の付き添い、絵本の読み聞かせ、個別指導補助、不登校児童へのコーチングや個別学習支援、登下校の見守りなど、数多くの場面でサポートしていただいています。

このように、地域の方々の支援は、本校の子どもたちにとってなくてはならない存在となっています。今後、コミュニティスクールとして、さらに地域と学校がさらに協働して子どもたちを育むことが重要になってくると考えています。

④「教師の働き甲斐のある学校」

教師の仕事がブラックと言われて久しく、教師のなり手不足、慢性的な教師不足がマスコミでも報道されています。しかし、冒頭に述べたように「国つくりは人づくり」であることは、間違いありません。未来を創るのは、９年間の義務教育を終えた子どもたちに他

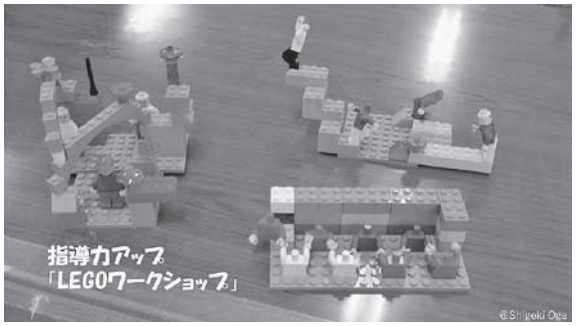
なりません。だからこそ、教師が自分の仕事に誇りをもち、働ける環境を整えることが不可欠です。４番目は、教師を取り残さない、です。そのために、右の図のことに取り組んでいます。

まずは、働き方改革です。勤務時間を少しでも少なくするために、業務量の削減を行っています。会議の回数を減らしたり、ペーパーレス化を進めて PC を活用したり、保護者への文書配付をメール添付にしたり、家庭への連絡も 15 時 30 分までに行ったり、保護者からの欠席連絡に SNS を活用したり、できることからどんどん取り組んでいます。試行錯誤しながらも着実に良い方向に向かっています。

また、小学校においても一部教科担任制を実施しています。

・５・６年生の家庭科の専科指導
・３・４年生の社会科の専科指導
・３～６年生の理科の専科指導
・４～６年生の２クラス間の担任による国語と算数の入れ替え指導

一部教科担任制の導入により、教材研究時間や保護者への連絡時間も確保できるようになりました。また、指導教科の指導レベルも上がってきています。



その他にも、コロナ禍で教職員の人間関係が希薄になってきているので、人間関係づくりの研修として、LEGO 認定ファシリテーターの方に講師をお願いして、３時間半のワークショップを行いました。「この学校をどんな学校にしたい？」「その中で自分は何をする？」をゴールに、各チームで理想の浪岡北小学校と自分のアクションを LEGO の作品にし、ストーリーを語り合いました。写真は、職員が作った LEGO 作品「理想の学校」で、右下は「教師と子ども、保護者が協働する学校」、右上は「子どもたちが助け合い、互いに刺激しあって向上する学校」、左上は「教師が協働し指導力を高めあう学校」です。普段、職員室では、会話の機会の少ない職員同士が語り合うことで人間関係が深まりました。すべての職員が「チーム浪岡北」に欠かせないということを共通理解とすることができました。

６．おわりに

SDGs は、学校教育と深くつながっており、以前から様々な取組が学校教育活動の中で実践されてきたと言えます。ただ、教師も子どもたちもそれを意識せず、表面的な理解に終わっていた部分が多いと言えます。しかし、社会の変化は、学校現場の変化を大きく上

回る速さで進んでいます。2030 年のゴールに向けて、今一度、自分たちの生活を見直し、取り組めることから始めることが喫緊の課題と言えます。

また、学校の SDGs では、「子ども、保護者、地域、教師」全ての取り残すことなく進めていく必要があります。学校教育が担う割合は大きく、言い換えれば、学校教育が、率先して、SDGs を実践することで、一段とゴールの達成が早くなると考えています。

2030 年のゴール達成に向けて、力強く前進していきましょう。

（大賀重樹　浪岡北小学校校長、公認心理師）